

一章 はじまり

その朝。

イタリアでは子どもの学校は6月半ばに早々と終わり、それ以降、母親はのうのうと寝坊ができる。わたしは久しぶりにふとんの中で乳房を触っていた。「月に一度は自己検診」というけれど、最近してないような気がする。ま、大丈夫だろうけど。

おや。

ここに、触るのは、何だろう。

右の乳房の内側のやや上。親指と人さし指で丸をつくったほどの、ぐりぐり。

これがあの、しこり、というものなのだろうか。

がん？

まさか。

でも、ほうっておくわけにもいくまい。医者に行って、良性なら良性との診断を受けねば。

いつ？

あと1週間で日本に一時帰国。イタリアだと専門医がどこにいるかわからないから、まず友人知人に尋ねてまわらないといけない。そして診察を申し込んでも予約がひと月先、なんてことはザラ。1週間で受診はとうてい無理だ。日本で診察だけは受けよう。そのあとのことは、そのとき。

とはいえ、日本の家に帰ったら、夏休みが始まるまでのわずかなあいだに、以前行っていた小学校と中学校に体験入学という形で4人の子どもたちを通わせる予定である。いずれ日本に戻って生活するときのための、わが家の毎夏の恒例行事だが、親にとっては体操服から習字道具、上履き、通学用自転車まで他の子と同じものを4人分そろえてやるのが、並みの忙しさでは

ない。今までの経験から、毎日駆けずり回ってたっぷり 1 週間かかるのがわかっていて。上の娘の頭痛が続くのに、検査をしてやらなければならない。わたし自身のごことは、そのあとになるだろう。

この優先順位は、母としての意識と責任感から来るものであった、とエラソーに言ってもいいのだが、やっぱりわたしは、ひよっとしたら待ち構えている宣告が無意識のうちに恐かったのだと思う。

実のところ、それまでのひと月がムチャクチャ忙しくて大きな変化もあったから、頭の切り替えが難しかったというのも、もうひとつの言い訳である。

そう、がんの可能性なんて、誰だって、あらゆる理由をつけて、考えたくないものではないか？

イタリアに来て 3 年が過ぎていた。

たまたま夫は長期のアメリカ出張で家にずっといない。

最初の予定ではこの出張後、この 8 月いっぱい夫のイタリア勤務が終わって家族で日本に帰国し、大好きなイタリアとはおさらばになるはずだった。

それを年の初めから覚悟していたら、案の定（じょう）学年終わりの 6 月は目が回るほどの大忙しだった。まず、インターナショナルスクールに通っていた子どもたちの発表会や遠足、友だちの誕生パーティが次々にある。送り迎えは当然、母たるわたしの仕事で、発表会にも行かなければいけない。わたし自身が通っていたイタリア語学校のお別れ遠足もある。4 人の子どもたちの送別会を開くのも親の仕事で、ディスコ、ボーリング場、屋内の遊戯スペースの 3 カ所で開くべく、場所を選んで予約してそれぞれ友人たちに招待状を出す。

引っ越し前には、日本ではワット数が違うので使えない電気製品全部と車を 2 台、広告を出して買い手を見つけ、引き渡す。日本に連れて帰る猫の健康診断と予防接種もしなければならない。それから、イタリアに来てわたしが習い始めたオーボエの最初の発表会。しかし、先生の選んだチャイコフス

キーの小曲が難しすぎて息が続かないうえに、国際クラブのパーティの準備が忙しくて、猛練習すべきときにまるで時間がとれない。わたしは国際クラブの会長をしていたから、他の 4 人の役員とともに夏のパーティを主催する責任があった。

パーティの準備でアレーゼの店を何軒も回って、くじの景品にする手描きの絵のついた灰皿や音楽の CD、香りのいい石鹸（せっけん）セット、アイスクリームの引換券、ヘアドライとブローのサービス券などを寄付してもらい、会場としてわたしの住んでいた団地の集会所を借りる申し込みをし、「トイレはこちら」の貼り紙を書き、ワインを何本買うか役員会で話し合い、音楽とゲームの担当者を募り、くじを娘につくらせ、と大車輪で動いていると、くじを売るフランス人との打ち合わせは夕食後の 9 時という日もあった。

「ひとに動いてもらおうと思えば、自分はひとの 3 倍働け」という、いつか聞いたことばを実践しているつもりだった。いや、単にわたしはなんでも自分でやりたがるタイプの人間なのかもしれない。

わたしのイタリア暮らしはこの国際クラブ抜きには語れない。わたしは棚ボタで会長になった。

クラブは正式には「アレーゼ国際歓迎クラブ」という名前で、イタリア人もいるが主に外国人の集まりで、23 カ国から来た女性約 100 人が会員である。夫の転勤で外国暮らしとなったものの、ことばがわからない、習慣も故国と違う、という夫人たちが助け合う必要から生まれたらしい。別の見方をすれば、外国から来た有閑夫人の集まりだと思ってもいい。日本人はわたしひとり、公用語は英語。もっともわたしは最近では半分以上イタリア語を使っている。アレーゼは、ミラノの北の郊外にある人口 2 万 5 千人ほどの町の名前である。

イタリアに住み始めるとき、わたしと夫とのあいだでは、せっかくイタリアで 3 年間暮らすのだから、なるべく日本人とはつきあわず、できるだけイタリア人や、イタリアでしか知り合えないひととつきあい、イタリアらしさ

を満喫しよう、というポリシーが一致していた。

では子どもの学校も現地のイタリア学校か、となるが、行ってすぐから親がイタリア語で教師と細かい話をするのはしんどいし、子どもの宿題を充分にみてやることもできない。ではせめて英語環境かと、アメリカンスクールを見学に行ったら、まるでアメリカを移してきたような雰囲気であってしまった。ヨーロッパまで来てアメリカ式にすることはない。で、イギリス式のインターナショナルスクールに決めた。5歳入学の小学校が5年、中学校が4年である。初めは毎晩2時間、上の2人の子の宿題を親2人が付きっきりでみてやるハメになったが、その時間はしだいに減っていった。

わたしは3年前イタリアに来るなり、夫の上司夫人のイギリス人に誘われて国際クラブに足をつっこんだ。日本人がほかにいないものだから何もかも新鮮でおもしろく、2年目に恐るおそる雑用係、3年目にも続いて雑用係を引き受けたら、イタリア人の行事係が引っ越していなくなってしまったので、行事係も思いきって引き受けた。行事係は最低月一度のお出かけを計画する、かなりハードな係である。土地勘がなく、ことばも不自由ななかで、外国人どうしがひとを誘って行くようなきれいな楽しいところを探そうというのであるから、勇気と知恵と馬力がないと務まらない係で、一番なり手がない。なんとかかんとかやっていたら、カナダ人の会長まで突然帰国していなくなってしまった。会長の任期は残り4カ月。そこで、「わたしやってみようと思うのだけど」と名乗りをあげたのである。

会長。

いっぺん、やってみたいではないか。

前の年に会長だったイギリス人のカレンは、歳は40過ぎと若いですが、小学校の校長を務めていたというだけあって器の大きい人材だった。が、次に会長をしたカナダ人のアンナは高卒の元銀行員という気さくな人柄で、見ていると、これならわたしにもできるのではないか、と思われたのである。

カレンと会長職を争って敗れたドイツ人のアンドレアは、やり手ながら傲慢で失礼なところのあるひとだったが、「国際クラブの会長なら履歴書にも

書けるもの」などとも言っていた。わたしも会長職に興味はあったが専業主婦暮らしが長かったあとでもあり、1年間やるほどの自信はなかった。それが今回はたったの4カ月、なおさら魅力的ではないか。

なにせ誰かすぐ必要、という非常事態だったので、役員会で「言うことなし！」とは残念ながら言われなかったが、「まあ大丈夫なんじゃないの」と決まった。

会長職といっても一番大きな仕事は毎月の例会で挨拶（あいさつ）をすることと、月報に一筆書くことで、わたしは人前で話すのは何語でも妙に好きだったから、苦にはならなかった。英語で冗談も言えた。雑用係として最初に外国人40人の前に立って話した時はさすがに胸がドキドキしたが、会長のカレンが、「わたしが会長ですが、一番仕事は軽いんです、ほかの役員がみんな仕事はしてくれますから」と自己紹介をしたあと、隣がたまたまわたしだった。即興で、「日本から来たマドカです。とっても緊張しています。だって、わたしが一番重大な仕事をするからです。……コーヒーを入れることだけど……」と言ったら、何人かクスクスと笑ってくれ気が楽になった。

ヨーロッパの年度は9月に始まり、長いながい夏休み前の6月に終わる。国際クラブはその年度末の6月に、例年家族をも含め100人近くの大パーティを開く。クリスマスパーティが会員だけの小規模なものなのに比べ、夏のパーティは会長職を締めくくる、1年で最大の行事なのである。忙しいのは当然だった。

食べるものは各自持ち寄りで、わたしはいつも握り寿司を出した。ねじり鉢巻で朝から1升の米を炊き、カンパチ、鮭、チヌの3匹を買いに行って自分でさばいてつくる寿司が、大人気で30分でなくなる。どうも、ちょうどヨーロッパでは日本食、特に寿司が流行し始めた時期だったらしい。日本でもイタリア料理がある時期からはやったようなものである。

話はそれるが、クラブのメンバーのひとりに隣町ローの高級海鮮レストラン「バルカ（小舟）」の娘がいて、わたしの握り寿司を美味しいおいしいと

喜び、レストランの厨房でつくって見せてくれないかと頼んできた。プロの前でとんでもない、わたしは日本ではつくったことがない、イタリアでは寿司は売ってないし食べに行く高いから、見よう見まねで握っているだけ、と驚いて断ったが、どうしても、と言われ、炊飯器持参で行くことにした。ずうずうしいのは生まれつきだ、うん。

コックは50センチを超える大きなピカピカしたスズキを用意していた。さすがにそれはわたしの手に余る。コックが鮮やかな手つきでさばくのを見ていると、わたしは何しに来たんだかとげんなりしたが、素人の主婦と承知でわたしを呼んだのは向こうである。開き直って、昆布を入れて炊いた米に酢や塩、砂糖を混ぜて握っていると、じっと見ていたコックが真似し始めた。が、米粒が掌（てのひら）にくっつくばかりでうまくできない。首をひねった彼は大匙（さじ）を取りだして2本両手に持ち、ニョッキ（じゃが芋団子）をつくる要領で、匙を八の字に合わせ、あわせして三角柱のような塊（かたまり）を米でつくってみせた。スズキを乗せるとコテッとこけるので2人で大笑いした。

「どうしてまたわたしを呼ぼうなんて思ったの？」と尋ねてみると、コックは「なに、好奇心さ」と言う。イタリア人には珍しくあまりしゃべらない男で、わたしが「ヨーロッパにない味なら中華でもいいじゃないの」と聞き返すと、「いや、俺は市場に魚を仕入れに行くが、中国人は俺が買わないような質の悪い魚を買っていく。あんな奴に料理を習おうとは思わない」と答える。

そういえばここでは中華料理店が、総じて安い。イタリア料理店は基本的に高く、日本で言うと料亭に近い感覚で、イタリア人が安く食べたり親どうしで打ち上げの宴会をしたりというときにはピザ店か中華に行く。利にさとい中国人は異国で商売をするのにそういう食いこみ方をしたのか、と感心するが、おかげで高級中華料理店は見たことがない。反対に日本料理店は高く、これはこれで高級感で商売しているのかな、と思う。バブル崩壊後は日本人ビジネスマンも観光客もガタ減りしたので、半分近くつぶれた、という噂も

聞いたが。

しかし日本料理店なるものに行っても、コックが中国人だったりウェイトレスが韓国人だったりすることも多い。ヨーロッパ人からみれば東アジア人の区別はつきにくく、また気にする風でもない。確かに日本でもイタリア料理店で働いているのが白人なら、何人（なにじん）でもかまわないという感覚かもしれない。

一度、日本料理店で天ぷら定食を頼んだら、天ぷらはカラリとあがって美味しかったが、ごはんが温かいすし飯で、わたしはこんなものが食えるか、日本ではこんなことは絶対しない、と店のひとに怒ったこともある。すると、「確かに板前は中国人だが、ミラノの日本料理店で修行したのだし、イタリア人にはこのほうが人気があるのだ」とウェイターはケロリとしたものである。ほかにも、日本料理店の焼きそばの麺がスパゲッティだったとか、具体的に説明しにくいがなんとも日本的な味ではない、ということもあった。思うようには手に入らない材料で、異国の地で作るのだからしかたがあるまい。

わたしたちはイタリアに来る少し前に 1 年間アメリカで暮らしていて、そこでも中華料理をよく食べていたのだが、おもしろいことに、その味が、アメリカで食べたときと、日本で食べたときと、イタリアで食べたときと、あきらかに違っていた。同じ中華料理でも、それぞれの国民の好みに合わせて変えてある。

一番美味しかったのは？ イタリアである。食に対するこだわりが一番強いからではないかと思う。そのうち中国に行って、本家本元の中華料理をぜひ食べてみたい。

この日はイタリアンレストランの厨房で握り寿司の実演がなんとか終わったあと、コックの兄貴で給仕長のアンドレアから「お礼に今度は旦那と食べにおいで」と申し出があった。わたしがあつかましくも正直に「日本では子どもを置いて夫婦で外食なんてしないんだけど」ともちかけると、「いいよ、連れておいで」とアンドレアはにこやかに笑う。わたしはさらにニヤリ

と笑い、「子どもね、4人いるの」と上目遣いに見やった。アンドレアは大笑いして「いいよ、みんな連れておいで」と寛大に言ってくれた。

昼下がりで暑かった厨房から家に帰ってみると、スカートの後ろのファスナーがぱっくり開いていてショッキングピンクのパンツが丸見え、ひとりで盛大に赤面した。いったい何時（いつ）から開いていたのだろうか？

さて国際クラブの夏の大パーティが無事に終わった翌朝、役員のクリスティから電話がかかってきた。

「ねえ、マドカ、きのう会場をかたづけるとき、椅子を中に入れたっけ？今朝起きてみたら雨でしょう。わたし気になって。もし傷（いた）めてたら弁償だものね」

「クリスティ。あんた疲れてない？」とわたしは聞き返した。

「クタクタよ」

「あたしも。今朝起きてみたらね、上半身裸なの。きのうの晩確かにTシャツ着て寝た覚えあるのね。何をまちがえたか夜中に起きて脱いでるのよ。でもまったく記憶がない。疲れ過ぎよね。あんたも疲れ過ぎて椅子を入れたのにさっぱり忘れてしまって、心配だけしてるんじゃない？大丈夫よ。あんたが心配ならわたし見に行くけど」

クリスティはわたしの間抜けな慰めに笑いだした。役員はみんな、最大の行事を終えて調子が狂ってしまっていた。

一方、オーボエの発表会は壊滅的な出来で終わった。数少ない日本人の友人で東京芸大を歌で出たというひとにピアノ伴奏をしてもらおうという、たぶん一生に一度の身分不相応な豪華演出だったのに、何がいけなかったのか途中でオーボエの音が出なくなり、冷や汗を流しながらそのまま終わった。あんなひどい出来は、練習のときでさえなかった。

旦那がいないんなら、と来てくれたフランス人と南アフリカ人の友人に礼を言い、がっくりきてことばもないまま、子どもたちとジェラート（アイス

クリーム)をなめて家に帰るはめになった。

夏至(げし)前後のこの時期、ミラノは夕方が長い。日が暮れるのは10時ごろである。夕飯を終えて子どもたちを次々に風呂に追いやる。涼しくなり、空が落ち着いた色に美しく、鳥のメルロが遠く近くで豊かな声で鳴きかわすのをわたしは庭でぼうっと聞いていた。夫の植えていったチシャが雑草の中に伸び、イタリア特有の大きなカタツムリの殻が見える。

ああ、終わるんだな、と思った。

わたしの人生でこんなに大変で、こんなに楽しいことはなかったイタリア暮らしが、もうじき終わるんだ。

イタリア人のパトリツィアやシルヴィア、ルチア、フランス人のクロード、リディア、アメリカ人のクリスティ、スウェーデン人のエヴァ、ドイツ人のモニカ、インド人のミリー、みんな会えなくなる。日本に帰ったら英語もイタリア語も話さない。彫刻に縁取られた華麗な噴水も、浮き彫りをほどこした古く美しい建物も、教会でのコンサートもない。おしゃれをして出かけていく国際クラブの例会もない。

帰りたくないなあ……。

でも、帰らないと。

しょうがないよ。

クラブ最後の例会で、英語で発表した自作の詩が、心をよぎる。涙とともに読み終わったら、10人ほどが、マドカ、よかったわ、わたしももらい泣きした、と言ってくれた、自分でもお気に入りの作品である。

たんぽぽ

来年の春、わたしはここにいない

だから、あなたが教えてくれた道から見える
畑のなかに一列に並ぶ樹に
わたしは頼んでおいた

一年たって
春の風が吹きはじめたら
やさしい梢のざわめきとともに
わたしの歌声（ハミング）を
あなたの耳に届けるようにと

それからまた
道端の眼に染みる青い草と
黄色いたんぽぽにも
よくよく頼んでおいた

四月の太陽がまた輝いたら
わたしの笑顔を
かならずあなたに思いださせてくれと

りんごの白いはなびら わたしの涙
枝垂れ柳はわたしの指先
鶺鴒（ひわ）のさえずり わたしのささやき
濃い八重桜よ わたしの弾（はず）む笑い声

わたしはあなたを忘れない

電話が鳴った。あら、珍しい。アメリカにいる夫からだった。国際電話だ

というのにえらく話が長くゆっくりで、嬉しいけれどどうしたのだろうと思っていると、夫は驚くべき知らせを告げた。「日本への転勤がなくなった」と言う。もう2年イタリア滞在。

何ですって？ 嬉しいけど、でももう、諦めてたのよ？ 心の準備はしてたのよ？ それが帰らなくていいって？

わたしは自分のまわりで世界がドンガラガッシャンと音をたててひっくり返し、そしてガラガラと勢いよく回り始めるのを感じていた。明日から、車を売る約束を取り消して前金を戻し、電気製品を売るのも断り、そして何よりインターナショナルスクールの小学校と中学校にとんでいってそれぞれ校長先生に会い、来年度のクラスの定員に空きがあるかないか確かめて、子ども4人の在籍継続を申し込まなければいけない。空きがあるといいけど。子どもたちは2歳違いの男、女、男、女で、上から中学4年、2年、小学5年、3年になる。それぞれの送別会も、誕生日パーティに変更して実行。猫は預ける手配をしなければ。一時帰国まであと3週間しかない。

夫には「よっしゃ、こっちはわたしがなんとかするから、あんたはアメリカで安心して仕事しておいで」と胸をはって見栄をきったけれども、実際にはクラクラするほどの忙しさが、もう一度目の前に見えていた。

それから2週間、イタリアでやるべきことをすべて終わり、わたしは4人の子を連れて日本に一時帰国した。そしてさらに半月後、日本で子どもたちのためにやるべきことを一通り終わり、それまで棚上げしていた不安と向き合う覚悟を決めて、まず地元の産婦人科に行った。

診察後、医者は詳しくは言わずただ精密検査を受けろと言ひ、他の病院を紹介してくれた。外科であった。

外科？

無条件で切らなければならないということか。

しかもわりと田舎の、ただの外科医院のようだった。たぶんコネがあるのだろう。

正直、ぞっとした。

専門のところでなければ、と時間の限られたなかで乳腺科を探して行くことにした。

しかし、最初の医者 of 診断が気になる。紹介状には宛名が書かれ封がされていたが、迷った末に、わたし自身に関するものであるから、と開けて読んだ。が、診断名は医者 of 崩し字が読めなかった。封筒には開封したとの旨（むね）を書いた。正直に言うが、紹介状に封をするというのは、たぶん相手の医師に敬意を払って、とか途中で改ざんされないように、とかいう理由なのだろうが、患者の立場からすると、患者からその情報を意図的に隠したい、というふうにも見える。ばかにしているのか、と思わないでもない。紹介状を書く医者には、そう思う患者の気持ちを理解してほしい。少なくとも、相手の医師に対するのと同等の敬意を、患者にも払ってもらいたいと思う。患者への説明が普及していない時代の話である。

乳腺科に行き、「告知」を受け、泣いた。

わたしが抱えているのは、まぎれもなくがんであった。

ハンカチ 1 枚をわたしがビチョビチョにしているなかで、医師が 1 時間ほどもかけ、きちんと説明をしてわたしの質問に答えてくれたのはありがたかった。事情を話すと、最初に全摘手術を日本でし、化学療法をイタリアですることを勧められた。

暑い夕暮れだった。病院が遠くて家まで車で 1 時間かかったのは、いいことだったのだろうか。ふだん冷房が嫌いで窓を開けて運転するわたしも、その日は窓を閉め、ラジオを大きくかけて泣きわめきながら帰った。

イヤだーっ！

どうしてわたしががんにならなければいけないの？

それほど悪いことはしていないのに、どうしてこんな目にあわなくてはいけないの？

それともわたしは、そんなに悪いことをしていたのだろうか。

わたしはまだ 42 歳。まだやりたくてやっていないことがたくさんある。

子ども4人を残して、死ねるものではない。

お乳をなくすのもいやだ。

イヤだーっ！

でも、家に帰ったら、普通の顔で子どもに晩ご飯をつくってやらねばならない。涙は見せられない。言うにしてももっとあと、治療にかかってからだ。

家に着く前に思い切り泣き叫んでおこうと、ラーメン店のがら空きの駐車場の片隅に車を止めて叫ぼうとしたら、もう涙は出なかった。

今日夫がいてくれたら。

なんでいないのよ、バカヤロウ！

アメリカにいる夫から電話がかかったのは、3日後だった。泣きじゃくるわたしに彼も動転したらしいが、どうしようもない。

次に告げなければならないのは、夫の両親だった。

毎夏わたしたちは茨城県で子どもの体験入学をすませたあと、山口県の夫の実家でひと月の夏休みを過ごしていた。わたしの実家もわりに近く、手術をするなら山口県になる可能性が高かった。

電話で何日に帰る、と告げたあとで、わたしは夫の母に「お願いがあるんですがの」と明るくもちかけた。「乳がんになったんで、治療するならどこの病院がええか、お母さんの友だちにもなったひとがおってじゃろうけえ、聞いちょいてもらえませんか」

乳がん！

義母は一言鋭く叫んだ。その声はその後何度かわたしの胸に蘇り、ああ、あのひとにあんな声を出させたくはなかった、と繰り返し思わせた。しかしその後義母は現実的に「わかった、聞いちょこう」と引き受けてくれた。

ここからが大変だった。わたしは手術と化学療法を、できればイタリアで受けたいと願っていた。精神的な問題である。イタリアのほうが、明るい。わりきっている。日本は、気持ちが暗い。見舞いも暗い。みんなまじ

めに、悩む。もちろんわたしも暗くならないわけではない。さんざん泣き嘆いたが、1日中暗いのはイヤである。忘れてほかのことを考えたりしたりする時間がなければやっていけないではないか。

しかも、化学療法は6カ月かかるという。わたしがそのあいだ日本にいるとしても、夫は仕事でイタリアにいななければならない。で、4人の子どもたちはどこにいる？ まだ子どもたちだけで家事がこなせるほどの年齢(とし)ではないし、夫ひとりでも無理である。子どもたちの気持ちのうえでも母親は必要だ。では日本にその期間だけ子どもたちを転校させるのか。しかも今まで慣れた茨城ではなく、祖父母はいるが周(まわ)りに友だちのいない山口に？ それはあまりに厳しい。で、夫は単身赴任？ こんな病気にかかって夫と離れているなんて、わたしには考えられなかった。

何より、日本の病院では茨城と山口の両方で、右乳房の全摘しかないと言われていた。わたしが「イヤだーっ」と泣きわめいた理由の半分は死ぬ確率のあるがんであることで、もう半分は乳房を失うことだった。たまたま夫の勤務先は製薬会社で、しかも夫はイタリアで抗がん剤の研究ばかりしていたので、がんに関してはわたしよりはるかに知識があった。その夫がイタリアでは乳房温存手術が盛んだというのだから、わたしは何が何でもイタリアで治療が受けたかった。

しかし茨城の医者、「温存温存と患者は言うが、欧米人の乳房は大きいから、がんを切り取っても乳房が充分残るけれども、日本人の小さい乳房では、がんを取り除けば全部なくなってしまう、同じに考えるな」と釘をさした。それは実際どんぶりを伏せたようなイタリア人の巨乳を見ていたから納得できたが、ではすぐに諦められるかということ、とてもそうはいかない。男のおまえに何がわかるか、というほどの未練執着がある。最善を尽くす前には、とうてい諦める気にはなれなかった。

一方で夫の両親からすると、だいじな跡取りの嫁に、日本の、しかも近い病院で治療してほしい、と願うのはあたりまえの話であった。海の向こうでは何をやっているやらわからず気をもむばかりだし、嫁の入院中孫の世話に

行きたくとも、買い物ひとつ、ひとりでできないのでは行きようがない。

結婚以来、夫の両親にはかなり世話になっている。出産から留守宅のことまで、わたしは自分の子に将来ここまではできまい、と思うほどで、また、わがままでいつも飛び跳ねているようなわたしに、義父も義母もずいぶん寛容だった。そのふたりへの心配は減らさなければならない。乳房の温存だの再建だのは当時の日本の常識では贅沢の極みで、単なるわたしの我儘でしかない。意地を張るわけにはいかなかった。

やむをえまい。おそろしくイヤであるが。

わたし自身のからだであるのに、どうしてわたしの希望が一番にならないのか。どうしてまわりの事情のほうが優先するのか。わたしは口惜（くや）しかった。

夫に予定を繰り上げて早く帰ってきてくれるようわたしは頼んだ。夫の両親の説得には夫が要る。

そして医者のことばが。

お盆の最中だったので、山口の日赤（山口赤十字病院）の医者は行くたびに替わった。最初の診察から検査、入院の準備を経て日本での全摘手術という方向へと話は順調に進み、わたしは毎日泣いていた。

去年まで、海の大好きなわたしは夏になると夫たちと釣りをするか泳ぎに行くかで、波の穏やかな瀬戸内海の沖へ2、300メートルも平泳ぎや横泳ぎで出、そのまま仰向（あおむ）けに浮いて休んでいるのが大好きだった。

わたしの上には空、下には海。このふたつしかない。

浮かんでいると、水がたぷ、たぷ、とゆっくりからだに打ち寄せる。大きなものに安心して包まれている感じがする。泳いでいると、海水という、空気とは違う抵抗をからだでかきわける感覚がおもしろい。人工の、複雑で、面倒で、きれいでないものなんて、なんてつまないんだろう、ここはなんて単純で広々として、豊かなんだろう、とつくづく思う。海藻やくらげはいつも快適とはいえず、ひどくかぶれたこともあるが、夏の海でしか味わえない楽しみは捨てがたいものだった。

おまけに前の年はサザエが豊漁で、わたしは 40 歳過ぎて生まれて初めて素潜りでサザエを取った。密漁になるのかもしれないが、売るのでなく自家消費なら当時とはやかく言われなかった。大潮の 1 日目は岩と貝の区別がつかないで坊主（収穫ゼロ）、2 日目には夫に「サザエを見つけたら、取る前に海の中でわたしに見せて教えてくれ」と頼み、やっと見分けがついた。そうになると、すぐ火になるたちのわたしはおもしろく、20 ほどサザエを見つけては、自分の水着の胸の中へ次々とほうりこんだ。肌に吸いつくなよ、と念じながら。

中のひとつは握りこぶしほどの大きさで、刺身にしてもうまかった。よし、また来年、と楽しみにしていたのに、義父と義母のふたりがかりで「海に行きどもせんこと（海に行くなんてとんでもないことはまちがってもするな）」と厳禁されてしまった。わたしにしてみれば、乳がんは自覚症状ゼロ、手術もまだなのに、どうして海水浴がいけないのかわからないのだが、病人はおとなしくしていなければいけないらしい。

わたしってやっぱり病人なの？

鬱々（うつうつ）とした日々の慰めは、イタリアから持ち帰ったクラシックの CD だった。パーセル作曲の「メアリー女王の葬送の音楽」と、オーランド・コンソートという男声四重合唱団が歌う 1400 年ごろのイタリア宮廷の古楽。葬送曲は重々しいなかに美しいのがわたしの落ちこんだ気分ぴったりだったし、合唱は無伴奏で古いだけにメロディがわりに単調なのだが、やはり美しく、心に響くものがあった。心身に不安のないときならそれほどいいと思わないかもしれない。が、死の影におびえるわたしにとっては、まさに癒（いや）しの音楽であった。

日赤病院はわたしの実家に近かった。わたしの両親は、イタリアからわたしが毎年一度帰るたび、少しずつだが確実に年老いて体力が衰えつつあるのがわかり、ふたりして「もうどっちがいつ死んでも不思議はない」と言い合っているようだった。父は酒びたりで、母は尋常ではないだるさを訴え、肝

硬変から肝臓がんをおこしていた。母娘 2 代で同時にがんになっていたのである。大学教授だった母にとって、わたしは出来の悪い育てそこなった娘で、40 歳過ぎてもよく嘆かれた。口にはしなかったがわたしが専業主婦なのを惜しむ気配があり、たかが親睦団体とはいえ、国際クラブの会長になったのを喜んでくれていた。わたしが行くたびに服をとっかえひっかえし、ミラノじこみのおしゃれを見せるのも、母は楽しみにしているようだった。

とうとう入院の日が来た。無念の思いでパジャマや着替えを詰め、わたしのためにアメリカから予定を切り詰めて帰国してくれたばかりの夫と日赤病院に行った日は、外科部長の診察だった。

ここで、彼はわたしの救い主となった。

「手術は日本、化学療法はイタリアと聞いちょるが、できたら両方同じ病院がええねえ。手術で取った細胞の検査で化学療法の薬も変わってくるし」

わたしはどれだけ喜んだかしれない。

強い望みはかなう、という経験が今まで何度かあるけれども（もちろん、かなわなかったことも同じくらいあるが）、今回も信じられないほど嬉しかった。医者が勧める、とは錦（にしき）の御旗（みはた）である。夫の両親の心配そうな顔には申し訳なかったが、わたしは自分の強運を信じた。

イタリアで手術を含みすべての治療を受けることが決まったのである。